

# 『干禄字書』覚書

— 漢字音に関する若干の考察 —

はじめに 『干禄字書』(以下、本書と略称)は一般には字形・

字体を正すものとして理解され、そう解説している。筆者もこれをもって、かつて小著を公にした。しかし、もう一つ大切な点がある。すなわち漢字音のことである。漢字の分類や排列などはすべて、字形からではなく、音(韻)によっている。今ここではその分類・排列の基準方法については問わない。要は音がどのよう<sup>1)</sup>に示されているかを考える一材料・資料として、本書を考察してみたいと思う。漢字音、特に『干禄字書』の場合、その成立からいって、約七世紀半のころである。したがって、中国唐代の漢字音に精通していなければ、正確に声に出して本書は読めないことになる。その点ではわたしはまったくの素人で、論ずる資格もない。しかし責任転嫁をするつもりはなく、既成の字典類によって、その一端を考えてみよう。

考究の都合上、ごく簡単に本書の構成を示しておく、その序で述べているように、〈名曰干禄字書以平上去入四声為次

毎転韻如  
朱点其上

杉 本 つ と む

具言俗通正三体大較則有三体  
非謂每字總然とあって、四声によって分類し、それぞれ〈平声〉に属する漢字、〈上声〉に属する漢字と、収録している。まず第一番目は、〈聰聰聰〉の漢字ではじまるが、この見出しに対して、細字双行の註文が、〈上中通下正諸從悉  
者並同他皆放此とある。この註文についてもいくつかの型があるが、既に考察したところなので割愛し、この註文中、〈音〉に関するところを一考してみよう。音を示す方法はこれまたいうまでもなく、日本のようにかながあるわけではないから、漢字を用い、主として二つの方法をとる。一つは〈反切〉、漢字の一字の音を二字(すなわち声母と韻母を一つにまとめることによって一字の音を示す方法)。一つは〈読若〉(次の直音とはば同じ)また〈直音〉(一字を既知の一字で示す方法)による方法である。この方法はそのまま、日本でも踏襲されているわけで、ごく一般的な方法である。ここではそれぞれの方法についての説明は述べない。しかるべき参考書にゆずる。

音と註文 以下まず「平声」より、註文で音を示している場合を列挙してみよう。活字化にあたり字体の多少の相違は無視する。

### 1. 平声

- a. 彤彤 上赤色徒反 下禁名音反  
b. 兕 凶 上通下正亦 懼也許音反  
c. 祇 祇 上神祇巨移反 下無聲移反  
d. 早 界 上尊卑下界 上齊聲音反  
e. 齋 齋 上齊聲音反 下齊聲音反  
f. 齋 齋 上齊聲音反 下齊聲音反  
g. 龜 龜 上中通下正此与精祖同 上中通下正此与精祖同  
h. 崖 涯 上山崖下水 上齊聲音反  
i. 俳 俳 上俳俳下 上齊聲音反  
j. 楷 楷 上楷楷下 上齊聲音反  
k. 審 審 上審聲音反 下審聲音反  
l. 餐 餐 上齊聲音反  
m. 企 企 上高舉兒許延反(中略) 上齊聲音反  
n. 標 標 上標記字必通反 下標記字必通反  
o. 傲 傲 上傲傲下 上齊聲音反 下齊聲音反  
p. 孫 孫 上孫字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
q. 抄 抄 上抄字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
r. 詔 詔 上詔字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
s. 場 場 上場字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
t. 芒 芒 上芒字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
u. 鎗 鎗 上鎗字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
v. 姪 姪 上姪字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
w. 鑿 鑿 上鑿字下 上齊聲音反 下齊聲音反

### 2. 上声

- a. 喜 喜 上喜喜下 上齊聲音反 下齊聲音反  
b. 褚 褚 上褚字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
c. 俯 俯 上俯字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
d. 饒 饒 上饒字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
e. 饒 饒 上饒字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
f. 坂 坂 上坂字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
g. 薄 薄 上薄字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
h. 琢 琢 上琢字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
i. 並 並 上並字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
j. 冷 冷 上冷字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
k. 檢 檢 上檢字下 上齊聲音反 下齊聲音反

### 3. 去声

- a. 逮 逮 上逮字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
b. 袂 袂 上袂字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
c. 喙 喙 上喙字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
d. 騰 騰 上騰字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
e. 繞 繞 上繞字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
f. 繞 繞 上繞字下 上齊聲音反 下齊聲音反

### 4. 入声

迂 迂 上迂字下 上齊聲音反 下齊聲音反

- a. 鞫 鞫 上鞫字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
b. 樸 樸 上樸字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
c. 摘 摘 上摘字下 上齊聲音反 下齊聲音反  
d. 緝 緝 上緝字下 上齊聲音反 下齊聲音反

以上である。「平声」にあつく、「入声」にうすい。あらためて註文の数を示せば次のようになる。

平声(二十三例)・上声(十一例)・去声(六例)・入声(四例)

合計 四十四例

本書は本来的に、音をあつかう字書ではないから、音を問題にしたところが四十四か所といつてもとがめることはできない。しかし、何故に甲に註文を与え、乙にはそれをしなかったか。もし原則というものがあれば知りたい。しかし通覧するかぎり、必ずしも妥当な解答はでてこないようである。もともとが一種の受験参考書である『干禄字書』に、学問的な原理・原則を適用させることは酷であろう。1. a. は類似字形故にそれぞれに念のために音を示したのであるが、1. b. は「凶」の字からすれば、「許勇反」の註文は必要ない。必要ないというよりも、こうしたものに音の註文を与えるならば、他に同じレベルで必要なものはすくなくない。したがって、何故に註文を与えたかを論議するのは別の機会にゆずって、目前の四十四例についてもうすこし考えていくことにしたい。註文引用は一部で省略したところもあるが、ややわずらわしいところもあるので、はじめにあげた二つの分類にそって、あらためて漢字とその音を示す註文とを対比してみよう。

### A. 反切による場合

1. a. 彤 徒冬反 1. b. 凶 許勇反 1. c. 祓 巨移反  
 / 祗 章移反 1. d. 界 必寐反 1. f. 齋 側皆反  
 1. g. 麤 才古反 1. j. 措 苦皆反 / 楷苦駭反 1. k.  
 蕃 亦音繁 1. l. 餐 千安反 / 殮 息魂反 1. m. 介  
 許延反 / 企 丘賜反 1. n. 標 必遙反 / 標 類小反  
 1. o. 傲 古堯反 1. q. 抄 初交又初教反 / 抄 弥小反  
 1. r. 誚 上高反 / 誚 丑冉反 1. u. 鎗 楚虔反  
 1. v. 登 又古饑反  
 2. a. 憲 許吏反 2. b. 蠱 竹呂反 / 褚 丑呂反 2.  
 d. 蠱 又力奚反 2. e. 餒 奴罪反 / 餒 於偽反 2. f.  
 阪 蒲板反 2. g. 漣 六本反 2. h. 琢 竹角反  
 2. i. 竝 亦蒲猛反 2. j. 冷 力鼎反 / 冷 力丁反  
 2. k. 檢 居儼反  
 3. a. 逮 徒計反 俗音徒再反非也 3. c. 嗽 許穢反 / 啄  
 丁角反 3. d. 鴈 音丈買反 3. e. 橈 奴效反 / 橈 火  
 高反  
 4. a. 鞠 其六反 4. b. 朴 普卜反 4. c. 摘 竹革反  
 / 適 他歷反 以上四十三字  
 B. 読若・直音によるもの  
 1. a. 彤 音融 1. e. 禕 音猗 / 禕 音暉 1. f. 齋  
 音咨 1. g. 麤 祖音 1. h. 涯 亦音饒 1. i. 俳  
 音俳 / 俳 音裴 1. o. 饒 音醺 1. p. 繇 音胃  
 1. s. 場 音長 / 場 音傷 / 場 音亦 1. t. 芒 音亡  
 1. v. 姪 音姪 / 嬌 音遙

2. c. 倪 音免非也 2. h. 琢 音豪 2. k. 檢 音斂  
 3. b. 秋 音麤亦音私 3. e. 橈 音嬌 3. f. 廷 音  
 庭非也

以上四十七字

註文と〈又・亦〉 以上、Aの反切より考えていくわけであるが、その前に引用中に〈又・亦〉とある点を検討しておきたい。まず〈A: 1. q. 抄〉に〈初交又初教反〉と二つの反切がある。しかしこれは現代日本語で読んでみると、ともに〈サウ(ソウ)〉となる。したがって〈又〉の意が無意味となるのである。〈初・交・教〉の字音を『大字典』で検してみよう。〈初〔漢〕シヨ・〔呉〕ソ、〉〈交〔漢〕カウ・〔呉〕ケウ / 教〔漢〕カウ・〔呉〕ケウ〉とある。こうして、〈抄〉は日本語音の反切では〈初交〉でも〈初教〉でも区別がないことになる。とすると、〈又〉はどういう意味になるのだろうか。しかし〈抄〉を『大字典』で見ると、〈抄〔漢〕サウ・〔呉〕セウ / サ〉と三種の音を与えている。したがってまた逆に、三種の音を示すように反切なり読若・直音で示さねば十分ということになりかねない。いずれにせよ、〈交・教〉には、〈カウ・ケウ〉のいずれかをあてることによって、〈サウ・セウ〉の音が出てくるわけであろう。〈交〉を〈カウ〉、〈教〉を〈ケウ〉と読むことにより、韻母が異なるのであるから、二種の音が考えられる。ただ、〈サ〉の音は何音になるのか未詳である。また熟語の類をみると、〈抄出セウ・シュツ〉をはじめ、〈セウ〉と読むのがすべてであって、〈サウ〉という音の例は一語もない。この点はどう説明すべきであろうか。あるいは漢音の〈サウ〉で

読むべき熟語が存在するのではあるまいか。不安である。さらに、次の〈抄〉は〈弥小反〉とあるので、〈ベウ(ビョウ)〉か〈メウ(ミョウ)〉の音が出てくると思われる。『大字典』をみると、〈漢〉ベウ・呉)メウ／セウとある。しかし、〈抄・抄〉のいづれの場合でも〈少〉が音符で、〈少(セウ)〉の音を示している。さらに〈抄〉の熟語には〈抄末セウ・マツ〉をはじめ、いずれも〈セウ〉の音で、〈抄權サ・ラ〉とある一例のみである。したがって、日本語では漢音も呉音も用いないことになる。すくなくとも七世紀半の中国語やそれを受けた日本語では、〈ベウ〉の漢音を用いていたであろうに、いつの間にか消失してしまったのであろうか。また〈セウ〉に読むことは誤りで、『大字典』に〈抄春〉を〈セウシユン〉と〈サシユン〉と読むのであろうか。すくなくともこの方は『干祿字書』や反切からは妥当しないように思う。しかし現代の漢和字典に信をおくよりも、『干祿字書』などの反切を用いるべきではあるまいか。しかし、『新字鑑』をみると、〈抄 ベウ〉とあり、熟語の〈抄春<sup>ベウ</sup>〉がみえる。したがって上でのわたしの想定は誤りということになる。すくなくとも、消失などせずに、現代でも〈ベウシユン〉と読めるわけである。『新字鑑』には〈メウ・セウ〉の音は示されていない。これまた不可解である。このへんまでくると、一体現代の漢和字典の音は何を根拠にし、いつの時代の音を規準にしているのであろうか。『大字典』は〈凡例〉に、〈漢呉両音の場合、又呉音の使用せられぬものは略して漢音のみ記載した〉と解説している。しかし〈抄〉は二つの字典で異なりが大きすぎる。字典が現代のもので、このように正確な

使用にたえなくなるのである。さらに〈又・亦〉とある例をぬき出してみる。〈反切〉では〈蕃・鑿・麤〉の三字であり、読若では〈涯・被〉の二字、これに〈非〉とある〈逮・倪・延〉の三字を加えて考えられる。また〈亦〉に音ではなく、〈撫拓<sup>開拓字</sup>〉と表示されている場合がある。〈拓〉は〈亦〉とあるので、直接、音の場合ではないが、間接的ながら、〈開拓〉の場合は〈タク〉の音であることを示す。ここは入声の場合なので、〈タク〉の音ではないことも示唆している。したがって、日本語化した場合には、平・上・去・入と四声によって音が異なることを推量させる。〈拓〉については『大字典』で、〈拓 (1) <sup>漢セキ</sup> (2) <sup>タキ</sup>〉とあって、一般に用いるタクは漢音でも呉音でもないことになる(ととに去声で韻は異にする)。さらに〈(1) ヒロフ、撫ニ同ジ〉とあり、〈(2) ヒラク〉とあるから、意味の違いは音の異なりと考えられる。そしてこの場合でも、字典では〈拓〉はタクと読む熟語のみをあげていて、ついに〈セキ・シヤク〉と読む例は一語もあげていない。おそらく、当時ならば〈セキ・シヤク〉で用いられていたであろうし、現代でも〈タク〉のみとはいえない。本文をみると、このところは〈跡迹役隄跡拓<sup>開拓字</sup>〉とある。おそらく〈セキ・セキ／エキ・エキ／セキ・セキ／セキ・セキ〉と読むべきで、〈入声〉には、〈イ音〉で終る例が二十五例、〈ウ音〉で終る例が一三五例であって、他の〈ア・エ・オ〉の三音で終る場合はない(もったもこれは現代の音によっているにすぎない)。『大字典』の〈凡例〉によると、〈漢・呉両音は韻鏡を標準とし、反切によりて之を定めたり〉とあるから、この『干祿字書』には及ばな

いのであらう。『新字鑑』では、〈拓〉に〈○セキ ○タク〉とあり、同じ漢音でも韻が異なることを示し、意味も〈○ひろふ拾抱・○(イ)ヒラク・(ロ)スル〉とあって、〈セキ〉に対しては〈ひろふ〉の意、〈タク〉に対しては〈ヒラク・スル〉の意が対応していることが了解できる。日本語に組入れられる過程で、〈セキ・タク〉となったかどうか。『新字鑑』には〈セキ・チャク〉の音はない。韻の異同はあっても、四声はともに入声で同一のようである。果して漢音は〈セキ〉、吳音は〈セキヤク〉といえるのかどうか、これも疑問である。いずれにせよ、現代の漢和字典では〈タク〉と読む場合しか示していないのである。『干祿字書』では、〈撫〉と対であるから、〈撫〉に〈ヒラク〉の意のないことが逆に、〈拓〉は〈セキ〉(ひろう)の読みを正しいと思う。A・2・jの〈冷・冷〉も、〈又・亦〉はないが、もとより別々の字としてあげている。これは〈涼・涼〉が異体と正体関係にあるのと異なっていて、はっきり別字(語)と区別しなければならぬということである。音も指示しているのである。〈レイ・リョウ〉であらう。〈丁〉を〈テイ〉と読むと区別がなくなる。しかし『大字典』をみると、両者まったく同じに〈〔漢〕レイ・〔吳〕リャウ〉とあり、漢・吳音の区別となっている。しかしこは〈上声〉であって、〈冷〉は〈寒〉の意であり、〈冷〉は〈川の名〉などで〈平声〉でみえる。四声が時代で変化したかもしれないが、同じ〈上声〉では漢・吳音ということではなく、別字で〈レイ・リョウ〉といった別音だったと思われる。『大字典』もいちは区別しながらも、〈冷氣 寒冷なる氣、冷氣〉など、きわめて誤解のされるまぎらわしい用

例と解を与えているのである。同じような例は本書の〈去声〉の〈〔亟〕にみえる。『大字典』では〈(1)〔漢〕・〔吳〕キョク／キ〉とある。ここの前後は本書では、〈秘・嗣・器〉など日本語音では一音節と考えられるのである。その点、『大字典』をみると、〈キョク〉は、〈入声〉で、〈キ〉は〈去声〉とある。したがって、ここも漢・吳音などの区別ではなしに、〈キ〉(たびたび・しばしばの意)が好ましいと思われる。『新字鑑』では〈○キョク／○キ／○カク〉とあり、○・○は〈入声〉・○は〈去声〉で意味もそれぞれ対応して記述されている。現代中国語音で〔chi〕であるから、〈キ〉の可能性も普通に考えられよう。

さてはじめにもどり、〈蕃〉の〈亦音繁〉とある点を吟味する。〈蕃〉は『大字典』に〈〔價〕バン (1)〔漢〕バン (2)ヒン (3)ビ〉とある。〈亦〉として、〈繁〉があるが、これも、〈(1)〔漢〕バン・〔吳〕ボン・(2)バン・(3)ハ・バ〉とあるので、〈蕃〉は〈ハン・ボン〉の二つの音を考えることができると思う。結果的に〈繁〉は〈ボン〉の音としてよからうか。そして〈藩屏〉の〈藩〉と並出されている点で、〈蕃〉は〈ハン・ボン・ヒン〉の音のうちの、〈ハン〉が妥当することもほぼ推定される。

〈鑿〉は『大字典』で、〈〔鑑〕に同じとして、〔漢〕・〔吳〕カン〉とある。音は〈カン〉ということになる。しかし本書の反切は〈古鑑反〉とあるから、常識的にいうと、〈カン〉である。したがって、〈カン又カン〉ということになって矛盾する。〈又〉が別音のある場合を示しているとなると、どう説明したらよからうか。しかしこの音は小論で用いた二つの字典ともに〈カン〉以外は見

えない。ただ『新字鑑』に〈鑑 chian〉とある点、〈ケン〉の音も可能性として十分考えられる。音符の〈鑑<sup>ン</sup>〉もあるので、韻母に〈日〉の音は考えられる。したがって〈ケン〉の音もあってよさそうである。本書からして、この音を今後、漢和辞典に入れてよからう。ただし平声と去声と両方あるが、ここは同じ〈平声（上・下など）〉の場合である。

〈龜〉は〈レイ〉のほかに〈力奚反〉ということになる。この反切も常識的には〈レイ〉となる。問題は〈奚〉の音であるが、字典類では〈漢〉ケイ・〈呉〉ゲイ以外はない。未詳である。しかしたとえば、A・1・jの〈楷楷〉（平声）なども反切に〈苦皆反・苦駭反〉とあるので、日本語音からはともに〈カイ〉となる。『大字典』でも両者は漢・呉音とも〈カイ〉とある。ただ〈楷〉には〈(3)カチ〉とある。しかしこれは〈入声〉の場合であるから、適当ではなく、結局、〈カイ〉のみとならう。〈楷〉もまったく〈カイ〉以外は字典にないので、〈皆・駭〉の反切を調べねばならなくなるのである。『大漢和辞典』でみると、〈皆〉は『集韻』で〈居諸切〉、『字彙補』で〈居之切〉とあって、片仮名での音の表示は〈日カイ 日キ〉とある。示された反切からいくと、〈キ〉は出てくるがかえって〈カイ〉が出ない。『統字彙補』には〈音箕〉と〈キ〉の直音を与えているようである。今ここではそれを問わない。『大字典』では漢音に〈カイ〉、呉音に〈ケイ〉、別に〈キ〉と三種の音が示されている。したがって、『大字典』は『大漢和辞典』にない〈ケイ〉があることになる。もっとも熟語としては、カイの音しか用いられていない。一方〈駭〉は、『大漢和

辞典』で引用の『集韻』では〈下楷切〉で、〈カイ・ガイ〉と二種の音のみである。いずれにせよ日本での代表的漢和辞典においても不明瞭ぶりはかわらないし、『千祿字書』を解説していくのはむづかしいのである。しかし〈苦皆反・苦駭反〉と別々に示しているということは両者が異音なることは確信してよからうから、〈楷〉は〈クナキ↓キ〉、〈楷〉は〈クナカイ（ガイ）↓カイ〉と読んでおくのが妥当だと思う。多くの人が経験しているように、〈手〉篇と〈木〉篇との代行は、正体と異体関係ではごく普通である。本書がそのこともあって、〈楷〉と〈楷〉とはその原則からはずれる故に、ここでとりあげて音を指示したと思う。こうした例は次の〈楷楷<sup>上音呂反</sup>下音呂反〉（上声）の場合でも同様である。ここでは〈竹・丑〉の音からはともに〈チヨ〉の音しか出てこない（竹はチク、丑はチウ）。要するに区別できないのである。『大漢和辞典』によると、〈楷〉は『字彙』を引用して〈丑呂切〉で〈チヨ〉の音を与え、〈楷楷〉は『集韻』を引用して、〈展呂切〉で〈チヨ〉、〈止野切〉で〈シャ〉としている。『大字典』は〈チヨ〉のほかに、〈楷〉に〈（呉）ト／シャ〉とある。〈楷〉は〈チヨ〉の音でよさそうであるが、同じ中国の字典でも、〈楷・楷〉ともに〈丑呂反（切）〉を与えているとなると、両者同音となる。〈楷〉も〈チヨ〉の音があっておかしいことはなさそうである。しかし、〈楷〉については、〈チヨ・シャ・ト〉の三音があり、いずれと決すべきか問題である。〈呂〉は特に異音はなさそうであるから、韻母は/で終らねば反切があわない。とすると〈ト〉が妥当するが、〈丑〉は〈チウ〉であるから、〈ト〉音があらう。それならば

《竹》なども語源的に中国語音からの転訛という説があるので、古く《ト》の音であったことと思う。《褚》も《ト》の音の可能性は出てくるのである。ただこの点も本書によって逆に、古代音が類推できるのではあるまいか。これは、1. e の《禪》において、てもいえそうで、本書では《禪》は《暉》(キ)の音であるが、『大字典』では漢・呉音は《キ》で、《キ・韓と同じ》の音や、ほかに《イ・キク》もあげている。したがって、《禪》と同じ《キ(猶)》ということになり、区別がつかない。幸にここは読若に準じる表示で、《キ・キ》と区別ができるわけである。ともあれ漢和辞典はあてにならぬしろものなのである。

2. i の《莖》は《蒲猛反》が別に《亦》で示されているから、一般的な《ヘイ》のほかに、《パウ(ボウ)》の音があるということになる。これは『大字典』にもあげている音で、参考までに示すと、(1)《漢》ヘイ・《呉》ビャウ／(2)ハウ・パウ／(3)ハン・パン」とみえる。

《逮》は《徒計反》が正式で、《テイ》の音である。そして《徒再反》は非なりというわけである。これは《タイ》の音になろう。『大字典』には《漢》タイ・《呉》ダイ／タイ・テイ・ダイ」とある。そして《逮逮・威儀逮逮》(『礼記』)の例を一例だけあげて、《テイテイ》と読ませている。その他すべて《タイ》の音でのみ熟語をあげていて、それ以外はない。本書での《非》が正式なものと示されている。そして、《テイ・ダイ》は(3)とあるので、(3)《安和ノ貌》の意で《タイ・ダイ》が、(1)で《オヨブ・追フ》の意となる。したがって、ここでは《及也》の意が与えられている

から、《タイ》の音を正式とするというのが『大字典』の説明であろう。しかしこうすると、本書との矛盾をどう説明すべきであろうか。いづれにせよ、本書で、《タイ》は《非》という点は無視できぬわけで、《テイ・タイ》と転訛したのかもしれない。『新字鑑』には《○タイ ○テイ》とあって、ほぼ『大字典』と同じである。しかし明確に二つの音を示し、《○》と意味の対応でも分けて示しているのである。これは《去声》の部であるから、四声の点では《タイ・テイ》とも同声のバリエーションであろう。ある時代に正しかったものが、次の時代には誤りとなるのは言語変化の常態でもある。最近は《執拗》より《シツヨウ》の方が正式になりつつある。

《袂》は音が《廢》でまた《拂》ということである。《拂》は『大字典』で、《漢》フツ・《呉》フチ／ヒツ・ビチ／ヒ」とある。したがって、是か非かの問題ではないから、《ハイ》の音のほかに《フツ・フチ》の音があるということであろう。しかし《袂》は『大字典』では、(1)《漢》フツ (2)《ヘイ》とあって、むしろ正式には《フツ・ホチ》である。その点では、本書と異同がある。他の場合でもそうであるように、本書に漢・呉音以外のものが正式とみられる点は興味をもたれる。『新字鑑』なども《フツ》のみで《ハイ》の音もないのである。こうしてみると、本書で反切以外で指示されている場合でも、別に示された音は七世紀半ごろの日本語に組み入れられた漢字音へのよき参考資料となる。逆に字典の類の漢・呉音の表示も必ずしも正確かどうか問題である。

〈僞〉は〈俯僞〉の見出しに〈竝俯仰字俗以僞音免非也〉とあるから、〈僞〉は〈フ〉の音で、〈免(フ)〉の音は非と註しているのである。しかし『大字典』では〈僞〔漢〕ベン・〔呉〕メン／フ〉とあって、むしろ、〈フ〉は漢・呉音のいずれの音でもない。興味あるのは、同字典に〈一説俯と同字〉とあって、本書に類似している。しかし、〈僞拾フ・ジフ・僞詘フ・タツ〉以外はすべて〈僞焉ベン・エン〉など〈ベン〉の音が多い。本書の〈非〉が一般化している点、上の〈逮〉の場合などと共通する。そして前例にもあったが、『新字鑑』と『大字典』では〈僞僂フル／ベン・ル〉のように、同じ熟語が異なる読みとなっている。『新字鑑』では、〈僞<sup>①</sup>Ben. ②ベン・メン〉とある。〈ベン・メン・フ〉の三音とも認めているわけでは、〈僞仰<sup>③</sup>ギヤウ<sup>④</sup>俯仰<sup>⑤</sup>ギヤウ〉とあって、『大字典』とは用例などすべてにおいてかなり異なるところがある。しかしいずれにせよ、本書で〈非〉の〈ベン〉が第一におかれている点はかわりがない。本書によって、むしろ〈ベン・メン〉は後の転訛、誤用類推の音であろうことも想定できるであろう。

〈涯〉は一般には〈ガイ〉である。したがって、〈亦音儀〉と註したわけである。『大字典』では〈漢〔ガイ・〔呉〕ゲ／ギ〉とある。この〈ギ〉である。したがって漢・呉の両音ではない別の音ということになる。『新字鑑』には〈ガイ〉の音しかあげていない。『大字典』の表示からいくと、唐・宋音及び、慣用音の一種が〈ギ〉と考えられる。本書によって唐代の音に〈ギ〉の音があったことが推定できよう。〈亦〉というのは、〈又〉と同じく、〈別にまた〉の意であることは明確であろう。おそらく古代では日本

語でも〈涯〉を〈ギ〉と読む場合があるはずである。

〈廷〉は〈今音庭非也〉とある点で、まず〈庭〉の音を確認しなければならぬ。これは本書の〈去声〉の部で、〈聴聽定廷廷〉と列挙されているところで、常識的には〈テイ〉の音でいいわけである。したがってここも逆に〈庭〉は〈テイ〉の音ではなく、別の音と考えるべきである。『大字典』では〈庭〔漢〕テイ・〔呉〕チャウ／テイ〉とあるから、さしあたって〈テイ〉以外を想定すべきであろう。〈廷〉も〈庭〉と同じく〈漢〕テイ・〔呉〕チャウ〉をあげていて、本書での〈非也〉はどのような音をさすのかや想定が困難である。〈チャウ〉は呉音とあるのだから誤りとは思えない。ただ『新字鑑』には呉音はあげず、〈テイ〉のみなので、あるいは〈チャウ〉の音をここでは〈非〉というかもしれない(上でもふれたように、漢・呉音は別に權威ある正確な音ではない)。〈今〉とあるから本書成立の七世紀半ごろ、そうした音(テイ以外の音)があったということであろう。註文でことわっている点は〈テイ〉以外にかなり一般に用いられていた〈ヘチャウ〉などの音の存在したことも想定できるかと思う。

反切／読若・直音 以上ではば問題になるところを検討してみたが、以下、すこし反切で問題になるところを考えてみる。

#### 1. u. 鎗 楚虔反

これは〈ソナケン〉であるから〈セン〉となるが、『干禄字書』の別本(蜀本系の『道空本』など)では〈虔〉が〈虔〉とあるので、おそらく楚虔と考えてよく、そのため〈ソナコウ↓サウ〉と



考えられる。『大字典』の〈サウ〉と一臨する。〈鑑〉も字典で  
〔1〕漢・〔呉〕タウ／〔2〕サウ・シヤウ」とあり、〈セン〉は無理で  
ある。〈鑑〓鑑〉は首肯できよう。

2. e. 餒 奴罪反／餒 於偽反..

『大字典』に〈漢〕ダイ・〔呉〕ネ」とある。反切からも〈ドナ  
ザイ・ダイ〉となって漢音と一致する、本書で、〈餒・餒〉を並  
出したのは類似字形をもつからであろうか。〈餒〉は〈於〉が問  
題になる。〈於〉は常識的には〈オ〉であるから、反切からは〈オ  
イ〉のようになってしまふ。『大字典』では〈餒〉と〈餒〉とは  
〈同字〉と示している。そこで『大字典』をみると、〈餒 (1)〔呉〕  
キ／(2)〔ダイ〕とある。しかしむしろ、この二字を混用したり同一  
とみることの誤りを指示することが、本書の意図の一つでもあっ  
たのだから、〈同字〉とする『大字典』はかえって誤りであり、好  
ましくない。そして〈委は音符〉という。したがって、まず〈キ  
wi〉の音を考えねばなるまい。本書で〈餒餒〉と並出したのは上  
でふれたように、当時としても混用、あるいは同一と誤解されて  
いた可能性があるからであろう。〈於〉はよく片仮名の〈オ〉の  
字源に引用される字である。したがって、〈o〉の音であろうか。  
『大字典』では、〈(1)〔漢〕ウ／(2)〔オ〕と四種の音をあげている。o/  
u・yoの音であろう。念のため、〈偽〉をみると、〔1〕漢・〔呉〕  
ギ、その他、〔2〕クワ・(3)キ」とある。いずれにしても、字典で  
示されている日本語音では、〈於偽〉で〈キ〉の音は出てこない。  
したがって、〈於〉が〈オo〉といった音ではないことを想定し  
なければなるまい。〈於〉をふくむ反切で次の例が参考になろう

か。すなわち、『元和版和名抄』(二十卷本)の〈雲雨類第二〉の  
〈雲〉の場合である。

雲 孫愜云雲雨雪相雜也音於驚反文選雲賦師説曰<sup>三</sup>

〔雲〕は〈於驚反〉とある。したがって現代日本語で〔雲

〔呉〕ヤウ」と読むにしては、反切からの〈オナケイ・キヤウ〉では  
あわない。〔驚〕を〈ケイ (漢音)〉と読むか、〈キヤウ (呉音)〉  
と読むかによって、〈エイ・ヤウ〉のいずれかに近くなる。しか  
し問題は声母の方である。わかりやすくは〈エイ〉をとりあげて  
みると、〈aナケイ〉の反切を考えればいいわけになろう。そこ  
で問題は〈a〉にあたる〈於〉なのである。上でふれたが、『大  
字典』は漢・呉音以外に、〈ヨ・オ〉の音(仮名)をあげている。  
しかも不可解なのは、列挙している熟語の類には〈於於ヲ・ヲ／於  
菟ヲト〉のように、〈ヲ〉の音(仮名)を用いているのである。

これによれば、〈於〉は〈オ・ヲ〉の両音があることを認めてい  
ることになる。そこで〈於〉自体の反切を考えることがより重要  
となる。『大漢和辞典』——これは率直にいうと、一般的には音  
についてあまり信用できないが——をみると次のようにある。

於 <sup>ヨ</sup>ヲ (集韻) 汪胡切 圖 要するに一・二に分けて、音

〔オ〕 (集韻) 衣禮切 圖 は〈ヲ・ウ・ヨ・オ〉の四音

漢呉音の区別は示さない)。すくなくとも他の字典にない〈ヲ〉  
の音をはじめに表示している。ことごと左様に日本の漢和辞典は  
いいかげんなものであるが、ここは辞書批判ではないからその点  
は筆を断つ。『集韻』を引用しての反切では、〈汪胡切〉とあるか

ら、 $\langle w + u + \text{コ} + \text{ウ} + \text{wo} \rangle$ の音が得られる。 $\langle \text{於} \rangle$ は文字の上からはともかく、 $\langle \text{ウ} \rangle$ と唇音であることは疑いない。ここで思い出されるのは、山田孝雄博士『五十音図の歴史』が $\langle \text{中期錯簡の音図} \rangle$ としてあげた五十音図の『説経口伝明鏡集第一可札字声事』の『裏書云』——これは明覚の『反音作法』のはじめの部分の抄出という——にみえる $\langle \text{アイウエヲ} \dots \text{ワキウエオ} \rangle$ のことである。 $\langle \text{オ} \rangle$ をワ行音としている。 $\langle \text{オ} \rangle$ を唇音としているならば、この音図は博士は錯乱と断じているが、むしろ正しいことになる。表記の上で $\langle \text{オ} \rangle$ とあるから $\text{wo}$ で、 $\langle \text{ウ} \rangle$ とあるから、 $\text{wo}$ と考えることは正しくない。要するに $\langle \text{オ} \rangle$ は $\langle \text{於} \rangle$ の省文からであり、 $\langle \text{於} \rangle$ は $\langle \text{汪胡切} \rangle$ であるから $\text{wo}$ に近い音なのであろう。ワ行音に妥当するのである。

さて、 $\langle \text{於} \rangle$ を唇音と考えると、本書の $\langle \text{饒} \rangle$ の反切、 $\langle \text{於} \text{偽} \rangle$ は $\langle w + i \rangle$ で $\langle \text{キ} \rangle$ が求められるし、『和名抄』の $\langle \text{饒} \rangle$ も $\langle \text{於} \text{驚} \rangle$ は $\langle w + ei \rangle$ で $\langle \text{エイ} \rangle$ が求められる。

ここで蛇足になるが、上であげた山田孝雄博士の『五十音図の歴史』の一部（同書、一八〇ページ以下）を次に引用し、批判しておきたい。

この「を」「た」の混乱は五十音図の歴史から見れば、平安朝の末期から端緒を生じ、鎌倉時代のはじめから著しくなり本居の時まで約六百年間国民をして惑はしめた容易ならぬ問題である。（中略）そこでこの「を」「お」の区別だけは或は声の平上去の差別によるものかといふに、それは頗る無理な事だといふことは仙源鈔の跋に於いて既に長慶天皇の喝破し給ふた所であ

る。

しかし、博士はついに漢字の $\langle \text{於} \rangle$ の音・反切については一言もふれていない。文字と発音とを一つに考えて、 $\text{wo}$ 、 $\text{ta}$ 、 $\text{lo}$ としているのは、むしろ思いこみにすぎない。すくなくとも『和名抄』を信頼すれば平安朝の前期から、 $\text{た}$ 、 $\text{れ}$ 、 $\text{wa}$ 、 $\text{wo}$ なのであるから、 $\langle \text{ワキウエオ} \rangle$ とあっても誤りということではできないはずであり、そうした五十音図の古い図表があってもよさそうである。さらに博士は次のようにも述べている。

さてここに、なほ一の問題がある。それはこのやうな問題が何故に他の仮名の遣ひ方の間になくてただ「を」「お」の間にだけあるのであるかといふ事である。この事は一面からいへばもとより「を」と「お」とを同じ様に発音した為からでもあらうが、しかし、それが発音の上からだけでは、かやうに念入りに誤りの続いて行はるものではあるまい。これには当時の文字の用法上、「於」を助詞の「を」の場合に用ゐたことの少なからぬ事実を顧みることが必要であらう。鎌倉時代の中期頃からの文献に「於」の字を助詞「を」にあてて用ゐた事は著しい事実である。

博士は発音の問題に気づきながら、まったくそれを検しなかつたのは残念である。そして、 $\langle \text{五乗乃道極} \dots \rangle$ 『日蓮上人遺文』などの例から $\langle \text{於} \rangle$ の用法——当然漢文の用法を源流として——と思うが、それにふれず——による五十音図の錯簡の要因をさぐっている。あるいはこれも一因かもしれないが、圧倒的に中国の文献や漢語・漢文で教育を受けた日本の学者は、むしろこ

うした用法は、急に鎌倉中期ごろからということではあるまい。

《於》が発音の上から明らかに、唇音で、ワ行音に属していたのである。したがって、あらためて、五十音図も資料文献の上で漢字表記とかな表記とに分けて考え、かつ、字体の《オ・ヲ》についてもその中味を十分に吟味して洗いなおす要があろう。平安末の三善為康撰という『二中歴』も《ワキウエオ》である。そしてさらにここで問題にすべきは《ハ》(を)の字源である《ハ》の反切である。周知のように、《ハ》の音は漢・吳音とも《ハ》であって、それこそ用字法から《ハ》にあてたのかもしれないのである。あるいは《ハ》を梵字に求めるか。また五十音図の存在はどこまで溯れるか。平安末期では新しすぎるのである。

次は《A・4・c 摘・撻》であるが、これは上の《冷・冷》と共通するところである。反切からいくと、《摘》は《タク》になり、《撻》は《テキ》となる。『大字典』をみると、《摘》は(1)〔漢〕テキ〔吳〕チャク (2)〔漢〕テキ〔吳〕チャクとある。そして、列挙している熟語はいずれも、《テキ》と読む場合のみである。『大字典』での音の表示は繁雑すぎて何が何やら理解しがたい。ただ(1)は《ハ》ろう、(2)は《ハ》の意と関連するようである。しかし、依然として《摘》は《テキ・タク・チャク》のいずれが最適か未詳である。『大字典』で《採》のところを見ると、《採摘サイ・テキ》とみえるので、《テキ》のよみであろう。したがって本書の《竹革反》による《サイタク》とは矛盾する。音については『新字鑑』の《○テキ○タク／通音テキ》がわかりやすく、意味との関係でも《○ツム・ツマム》とみえるので、この意では《タク》が用いら

れると理解できるであろう。したがって同字典に《採摘》を《サイタク・サイテキ》と読んでいるのは妥当する。この字音は唐時代の字音をも正しく伝えているものか。現代語音としてのそれであるが、四声・韻・慣用などから、『大字典』より好ましい《サイタク》を示していることになる。次の《撻》に反切で《テキ》とあるのは《摘》の《タク》と異なっていて妥当するわけである。これも『大字典』で、(1)〔漢〕テキ〔吳〕チャク (2)テキ〔吳〕チャク (3)タク〔吳〕チャクとあって、これまた混乱をたどるのみである。これだと、本書でわざわざ《竹革反・他歴反》と、区別して示している点を解明しがたい。『新字鑑』では、《○テキ○テキ チャク》とあって《タク》はない。ともあれ、こうした類似字形については、音を示してその區別を明確にするよう心がけているのが本書である。

次はBの《説若・直音》の部分について、紙数の許すかぎり考えておく。

#### B・1・i 俳・俳

これは註文によると、《俳優字音俳／俳徊字音裴》とあるから、意味の異同を明確に示しているのである。したがって音も、別々に示している点、異なることは明確であると思う。日本語音では、《ハイ》であるが、《俳・裴》ともに《平声》であり、『大字典』では、《漢》ハイ〔吳〕ペとある。しかし、《俳徊》の熟語からはハイ以外の音は推定できない。現代中国語音で《俳・裴》は、俳・裴〔péi〕とあり、《俳》の代りに《裴》を用いることはあっても、《俳》の代りに、《裴》は用いないようである。いうまでもなく中国語では古代でも区別ある発音だったと思う。やはり七世紀

B · 2 · k 檢斂／檢 居儼反 ..

まだわたしには多くのことが記してある。吟味すべき

誤用類推が、結果的に言語の進化を助けていることにもなる。しかし、できるかぎり正確な本源のものに近づきたいというわたくしの微志から、この稿をものしたわけである。

(2) 小川環樹『反切の起源と四声及び五音』(『言語研究九・十号』)を参照。

a) 以下ほとんどであるが、これは音の相連を明解にし、意味を明確にして、混乱を防止したわけである。したがって、正体・異体の関係では音をあらためて明示する必要はないはずで、1・b以下にみられる数例は、原則から多少ずれていることになる。ただし個別的に文字用法の異なりと関連するので他日を期す。

と関連するので他日を期す。

[ 74 ]

た。節、長音は二音節とした。赤木幸さんの御苦勞をお願いし

合 計	入			去			上			平			四 声	
	計	二音節	一音節	計	二音節	一音節	計	二音節	一音節	計	二音節	一音節	音節	韻母
33	1	0	1	8	0	8	9	0	9	15	0	15	ア音	イ音
250	25	25	0	78	57	21	45	21	24	102	56	46	イ音	ウ音
387	125	125	0	56	52	4	69	60	9	137	129	8	ウ音	エ音
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	エ音	オ音
56	0	0	0	15	0	15	20	0	20	21	0	21	オ音	N音
200	0	0	0	58	58	0	50	50	0	92	92	0	N音	計
928	151	150	1	215	167	48	193	131	62	367	277	90		

＜備考＞：二音節語が多くなっている。日本語化の結果である。ウ音が多いのは、ヨーロッパ語化などと共通しよう。エ音が皆無なのも参考になる。イ音・ウ音が基本になっている。撥音も n, m, ng に3分類すべきであろう。数え方で多少異なりがあるので概略と解されたい。

(5) 山田孝雄『五十音図の歴史』(宝文館、昭18年・4刷)を参照。

## 新刊紹介

矢島道弘著

### 『悪鬼たちの復権』

「悪鬼たち」とは、太平洋戦争後の所謂無頼流の作家達を指す。本書は近代文学流の作意的ともいえる無頼派批判と、それを中核とする戦後文学史観とに疑問を投げ、無頼派の「復権」を求めようとしたものであるといえよう。彼等の「無頼」は生活無頼としてではなく、文学レベルでとらえられるべきだというのが、著者の基本的な姿勢である。彼等の原点を封建的色合いの濃いその「家」に求め、文学的出発を昭和十年代に置くことにより、彼等の無頼に共通する反逆精神が、戦後の特殊状況下における単なる一現象ではなく、あらゆる権威や既成概念への反逆であり、束縛を拒絶する自由への憧憬であったと考え、また一方で、現実及び人間に対する彼等の洞察の深さを説明していく。彼等に寄せた著者の深い愛着とでもいうべきものを感じさせる一冊である。内容を大別すると、総括的な無頼派論と、織田作之助・大宰治・坂口安吾・田中英光論とから成り、他に無頼派関係の書評二本を含む。

(昭54・4 三弥井書店 二、五〇〇円)